

戦争の中のある少年の日常

下田 勝啓

聞き手・光葉 啓一



幼いころの下田さんとお父様

昭和九年一〇月、神戸市須磨区大手町で私は生まれました。父は日本郵船の船員だった。四歳の時、父が三菱電機神戸製作所に転職した。私たち親子三人は兵庫区荒田町にある社宅に引っ越した。

昭和一六年四月、多聞国民学校（生田区楠町。現在の中央区楠町）に入学。多聞国民学校は同年三月まで多聞尋常小学校だった。私は国民学校の一期生である。

入学早々の一学期、父が園田村に転勤になった。前年の二月に三菱電機が兵庫県川辺郡園田村（現在の尼崎市塚口本町）に神戸製作所の分工場（後の三菱電機伊丹製作所）を設立したのである。私たち親子は伊丹市の社宅（伊丹市南野および御願塚の各一部。現在の伊丹市若菱町）にまたもや引っ越した。そしてそれに伴い、私は立花第一国民学校（川辺郡立花村。現在の尼崎市栗山町）に転校した。社宅は田園地帯の中に建てられており、二〇〇軒ほどの平屋建ての家が整然と並んでいた。

ところがその後、越境入学が認められなくなり、稲野国民学校（現在の伊丹市昆陽一丁目）に再度転校した。二年生に進級する前のことである。

開戦

昭和一六年一月八日の開戦は大人から聞いた。一年生のときである。日本は強いと思った。予科練（海軍飛行予科練習生）に行こうと漠然と思った。

戦況は大人たちの噂話から知った。ラジオのニュースも聞いていたが、国民に発破をかけるような内容だった。誰にかかわらず、戦争に反対するような内容を喋ったりすると憲兵が捕まえに来ると大人から聞いていた。

神戸の多聞国民学校一年生のとき、出征兵士の見送りをした。近所の人だった。タスキを掛けていた。また、伊丹の稲野国民学校の一年生か二年生のとき、叔父の出征を家族全員で見送った。近所の人もたくさん来てくれた。自分も大人になったら同じように戦場に行くんや、と思った。怖くはなかった。

社宅では隣保（隣組）が形成されていた。縦横に家々が列を成しており、同じ列の何軒かが一つのグループである。防火訓練なども隣保単位で実施された。バケツリレーなどの消火訓練や防空壕への避難訓練などが行われた。親たちが子どもを連れ、家族ぐるみで参加した。社宅の各家の外にはコンクリート製のごみ箱と、同じくコンクリート製の防火用水槽が設置されていた。

学校では体操の授業のほとんどが防空演習や軍事教練に置き換えられた。防空演習では空襲時の避難訓練など、軍事教練では木製の疑似銃剣で敵を突く練習などをした。普通の内容の体操をした記憶はほとんどない。強いて言えば相撲。また音楽の授業では、「露営の歌」（勝つてくるぞと勇ましく……）などの軍歌が、唱歌・童謡よりも多く教材として使われた。

学校の運動場の端に奉安殿（戦前の日本の学校に設置された、天皇・皇后の写真と教育勅語を納めていた小さな建造物）があった。朝礼のとき校長が号令をかけ、全員が奉安殿に向かってお辞儀をした。朝礼など

の際、校長や教員が話の中で天皇の話題に触れるとき「天皇陛下」という言葉を発すると、全員が直立不動に姿勢を正した。行事などにおいては必要に応じて、奉安殿から取り出した教育勅語を記したものを校長が読み上げた。全員で教育勅語を暗唱することもあった。子どもたちは教育勅語を暗記させられた。

当時の遊びと言えば、独楽の鬼ごっこを思い出す。掌に独楽をのせて鬼ごっこをする。独楽が回っている時だけ移動することが出来る。ドッジボールや将棋もした。夏は家の近所のため池で泳いだ。

学童疎開

昭和十九年。四年生の一学期に疎開の話が持ち上がった。両親は相談し、母の実家に私と母が疎開することに決めた。集団疎開ではなく縁故疎開を選んだのである。母の実家は兵庫県朝来郡和田山町白井村にあり、祖母が一人で住んでいた。

秋に出発した。なにがしかの感慨があるのでもなかった。頻度を増す空襲のことを考えると、「行かなあかん」という気持ちだった。親子三人、省線の伊丹駅から福知山線で福知山駅に行き、山陰本線に乗り換えて和田山駅で下車した。蒸気機関車だった。駅から四キロほど歩き実家に着いた。父は一泊して翌日、伊丹に帰った。

祖母は左手が不自由であった。小刻みに震え、家事全般にも支障があった。親戚をはじめ近所の人たちが祖母の世話をしていた。田舎では地域が一つの家族のようであった。

東河（とが）国民学校（現在の朝来市和田山町東和田）四年生に転入した。家から歩いて三〇分ほど。規模が小さく、どこかの分校のような雰囲気だった。

クラスの人数は三〇人ほど。男女共学なのでびっくりした。学校規模が小さいのでやむを得なかったのかもしれない。クラスの中で疎開の子

どもは私だけだった。ほぼ同時期に、神戸の国民学校から男子たちが集団疎開で来ていた。そして近所のお寺を宿舎にしていた。彼らは、四季を問わず周辺の畑のさつま芋や胡瓜や柿や栗を盗んで食べていた。そんなこともあって、私の新しい級友たちのほとんどが、都会から疎開でやって来た子どもたちを良くは思っていなかった。そしてその敵愾心が転校生の私にも向けられた。転校早々、級友たちの冷たい視線にさらされた。友達もできず、私はみんなから無視された。

担任のK先生は三〇過ぎの男性。校庭に隣接して職員の宿舎があり、ご夫婦二人でそこに住んでおられた。

伊丹と違って空襲もなく、そういう意味においては穏やかな学校生活が一日一日と過ぎていった。伊丹の稲野国民学校からの連絡のたぐいは疎開の間、何もなかった。

校外活動で近くの山に薪を拾いに行ったこともあった。

冬になると子どもたちは、竹で作った手製のスキー板でスキーに興じる。それを知った父が子供用のスキー板を買って、和田山まで持ってきてくれた。しかし、それまで一度もスキーの経験のない私は、満足に滑れない。片や地元の子どもたちは皆スイスイ滑っている。へっぴり腰で転んでばかりいる私は目立った。複雑な気持ちだった。竹スキーの方がいいと思った。

年が明け春になった。少々事情があり、母が伊丹に帰ってしまった。残された私と祖母の二人では暮らしが立ちいかなかった。そこで、学校のK先生が住んでいる宿舎に私と祖母が同居させてもらうよう、近所の人たちが先生に頼み込んだ。先生は快く承知してくれた。そして急遽引越しとなった。

先生のお宅での生活が始まった。ところがタイミングが悪いことに、先生に召集令状が届き、何日か後に先生は出征した。

先生がいなくなったので先生の家には居づらくなった。伊丹に帰ろうと決意した。先生のお連れ合いにそのことを告げ、蒸気機関車に乗って一人で伊丹に帰った。

今でも振り返ると、疎開に関しては嫌な思い出が多い。集団疎開の方

が良かったと思う。

機銃掃射

疎開の前から空襲はあったが、疎開から戻ると空襲の頻度が増していた。

私が疎開している間に、私の家を含め社宅のそれぞれの家の庭に防空壕が掘られていた。五、六人が入れる程度の穴を掘り、出入り口の部分だけを残して板をかぶせ、さらにその上に土をのせて屋根とした。その後、数えきれないほど防空壕に避難した。防空壕には防空頭巾をかぶって入る。灯り用にろうそくが置いてあった。避難中に機銃掃射の弾がビシッ、ビシッと音をたて、防空壕の屋根に着弾したこともあった。子どもなりに防空壕の中は安全だと信じていたので、怖くはなかった。幸い誰も怪我がなかった。

学校の籍を稲野国民学校に戻した。三菱電機の社宅から稲野国民学校まで片道四キロメートルほど。田畑が広がるなか、あぜ道などを歩いて通学した。いちじく畑が多かった。

一年生の頃は各自バラバラに登下校していた。しかし、戦局が厳しくなり警戒警報や空襲警報が多くなって、集団登下校が導入された。近くに住んでいる子どもたちで班を組む。私の場合は社宅の子どもたちが同じ班だった。登校時は上級生、下級生を含めての集団登校。高等小学校二年生の少年が班長だった。下校については学年によって下校時間が違うので、同じく社宅の同級生で班を組み集団下校した。登下校の際には防空頭巾を被った。被ると冬は暖かった。

警戒警報・空襲警報は二日に一回くらいの頻度で出た。授業中、休み時間にかかわらず、警戒警報が鳴るとすぐ下校準備にかかる。警戒警報は断続的に鳴るサイレン。急いで下校するが、たいてい途中で空襲警報に変わる。空襲警報は音が途切れず鳴りっぱなしのサイレンである。警

戒警報から空襲警報はいつもすぐだった。急いで帰らないといけない、急いで防空壕に入らなければいけないと思った。恐怖心はなかった。大きくなったら予科練に入るのだ、特攻隊に入るのだと思っていたので、死ぬことは怖くなかった。警報による下校の場合、再登校はしなくてよかった。

下校途中で機銃掃射にたびたび見舞われた。爆弾を搭載したB二九爆撃機一機とアメリカ機動艦隊の艦載機三、四機がチームを組んでいる。B二九の大きな主翼に守られるように、その下に艦載機がいる。機銃掃射が始まる。集団下校している私たちの横二、三メートルの田圃の中を銃弾が走る。ピシッ、ピシッと田圃の水に着弾する。弾をよけるのに必死で、頭の中はそれしかなかった。あぜ道沿いにお百姓さんの荷車が置いてあるときは、その荷車の下に潜り込んだが、大勢の子どもが避難できる広さではなかった。下校中の子どもたちが機銃掃射で怪我をしたり死んだりしたという話は聞いていない。おそらく無かったのではないかな。私たちがへの機銃掃射の目的は脅しだったと思う。

敵機を地上で迎え撃つ日本軍の高射砲の砲弾は届かない。その落ちてきた砲弾に当たって死んだ人がいたらしい。社宅の大人たちがそういう話をしていた。

田畑のあちこちに爆弾投下の跡の大きな穴があり、そこに雨水が溜まって池のようになっていた。

ジュラルミン製の六角形の焼夷弾が不発のまま田圃に突き刺さっていたことがあった。それを引き抜き、ボールのように地面に放り投げて友達と遊んだ。幸い爆発することはなかった。家に帰って親にその話をしたら、ひどく叱られた。そして親に言われ、近くのため池に捨てに行った。

日本軍の無線を妨害するため、敵機が錫製のテープを投下することがあった。幅二、三センチ、長さ五メートルほど。地上に落ちたり、送電線鉄塔に引っかかりたりした。銀色にキラキラ光って、とても綺麗だった。取りに入ったりしたら親に叱られた。日頃から「触ったらあかん」と言われていた。

灯火管制のため、天井から吊り下げた電灯の傘に黒い布の袋のようなものを被せた。警報が出て、あわてて被せるようなこともあった。当時、停電が多かったので、家の中では油のランプを常備していた。

金属類回収令により鍋や釜を供出した。

神戸市や大阪市は大規模空襲を受けた。そのような都市と比べると、伊丹市での被害規模は大きくはなかった。

ひもじい日々

戦争中はとにかく食料不足で、ずいぶんひもじい思いをした。

配給制度は一年生の頃から始まったと思う。配給品としては、米、小麦、醤油、砂糖、味噌、酒などの食料品やシャツ、ズボン、足袋などの衣料品のほか靴などもあった。配給所に行き、配給通帳や配給切符を持って並んだ。一人当たりの量が決まっていたが、必要量からは程遠いものだった。

田舎に知り合いがいる人は、食料の買い出しに田舎へ行っていた。着物や帯を持参しての物々交換である。私が住んでいた社宅の周囲には田畑がたくさんあったので、お百姓さんから野菜などが買えた。

年がら年中空腹状態であり、辛かった。しかし、自分たち家族だけではなく周囲がみんなそうだったので、我慢できた。

食料不足の生活の中で食べていたものを思い出すと、以下のようなものがある。

■ほうらく（素焼きの平たい土鍋）で炒った大豆を米に混ぜて炊いた。配給の米が少ないので豆でかさを増やす。腹持ちがいいようにするためである。しかし、米より豆の方が多い。当時、豆ばかり食べていた。

■コーリヤン（モロコシ）を米に混ぜて炊くこともあったが、まずかった。

■団子汁（すいとん）の団子は小麦粉で作る。小麦粉は表皮（ふすま）

が混じっているので茶色である。食べるとばさばさしている。汁は味噌仕立てで、大根を入れたりした。

■豆かす（大豆から大豆油を搾り取ったあとの粕）をつぶして煎餅にしたものを商店で売っていた。それを買って雑炊に入れた。

■サツマイモやジャガイモはふかして食べた。芋はよく食べた。

■サツマイモのつるを干し、炒めて食べた。

■ヨモギやオオバコを摘んできて、お浸しにして食べた。

■カボチャの種を炒って白い殻をはじかせ、濃緑色の中味を食べた。

■桑の実を採ってきて生で食べた

■サザンカの花を摘んで蜜を吸った。

■乾パンは配給品で、唯一の出来合いのおやつだった。たまにしか食べることが出来なかった。

■肝油（タラやサメ、エイなどの肝臓から抽出した油）を四角いゼリー状にしたもの。これもまた、たまにしか食べられなかったが甘いおやつだった。肝油は元来、子どもの栄養補給のための薬である。

■整腸剤の「わかもと」をおやつ代わりに食べたことがある。

進駐軍

昭和二〇年八月一五日の玉音放送は家で聴いた。大人たちはその前から敗戦を覚悟していたようだ。放送を聴いたとき、その意味するところが私は分からなかった。後日、大人から日本が負けたことを教えてもらった。悔しい気持ちが沸き起こった。これからどうなるのだろう、と思った。

戦争が終わり、灯火管制もなくなり、伊丹の様子は少しずつ変わっていった。大人の男性の、軍服のような装いを見ることが少なくなっていた。学校では、先生の指示により、教科書の墨塗りをした。学校においてではないが、脱脂粉乳を飲んだ記憶もある。

伊丹空港が進駐軍に接收された。また、自分たちが住んでいた社宅の独身者用の一面が進駐軍の兵士の宿舎として接收された。接收された一面を囲む形でフェンスが設置された。そして、進駐軍の兵士が入居し始めた。私たちはすぐ側に暮らしているので、私にとって兵士たちは身近な存在だった。近所の子どもたちが兵士にチョコレートやチューインガムをねだるようになった。成り行きで私もそれに加わった。菓子を貰うと嬉しかった。恥ずかしさや悔しさはなかった。

兵士たちは汚れた衣服を洗濯屋に出す術がないので、何日か着たら燃やしていた。近所に住む学校の上級生たちが、焼く前の衣服を盗るようになった。フェンスの網目に竹の棒を突っ込み、焼く前の衣服を盗るのである。ところが、それを見つけた兵士は怒るでもなく、むしろニコニコ笑っている。しまいには兵士自らが竹の棒に向けて衣服を放るようになった。

DDT（有機塩素系の殺虫剤）の洗礼も受けた。社宅に住んでいる者全員が集められた。進駐軍兵士は小型の手動噴射器で住民一人ひとりに頭から粉のDDTを吹きかけた。

戦後、父は三菱電機神戸製作所に派遣された。進駐軍関係施設のボイラーや冷蔵庫の修理なども業務の一つだった。神戸・元町の海岸通りに進駐軍神戸基地のカミサリー・ストア（基地内の売店）があった。進駐軍関係の仕事をしているため、カミサリー・ストアで販売しているパンや果物や衣服を、父は我が家に持って帰ってくれた。

昭和二十二年。六年生になると、中学校受験を希望する者を対象とした放課後の居残り勉強が始まり、私も参加した。ところが学制が変わることになった。新制の中学校は義務教育制度に含まれることになり、全員入学のため入学試験がなくなった。昭和二十二年四月、伊丹市立西中学校に私は入学した。私の世代は、国民学校一期生、新制中学校一期生である。

戦争になってしまうと、人々は傷つき、命を落とし、苦しい生活を強いられる。だから、決して戦争を起こしてはいけない。私たち一人ひとりが改めてそう思うことが、大きな力になると思う。